

園のおたより



第 8 号

令和 6 年 1 2 月

埼玉大学教育学部附属幼稚園

サンタクロース

園長 関 由起子

12月の最大のイベントと言えばクリスマス。こどもたちに「サンタさんにはどんなプレゼントをお願いしたの？」とこっそり聞いてみました。1組のAさんは「あのね、あのね、ないしょ」、2組のBさんは、大きな声で「○○!」、3組のCさんは、「○○○なんだ」と耳打ちしてくれました。みんなとても幸せそうで、私も嬉しくなりました。

クリスマスは私も親となってからは緊張する最大のイベントであり、数々の思い出があります。今回は、我が家に起きた大騒動をご紹介します。私の娘が小学校6年生の時、「友達のAちゃんが『サンタに頼んだプレゼントがパパの部屋にある』って言った。サンタクロースはパパなの？」と聞いてきました。その時は「単なる偶然じゃないの？」と適当にごまかしたのですが、とうとうこの日がきたか、と思いました。けれども、小学6年生で気づくとは遅くないか、と疑問に思いつつ、回答方法をネットで検索しました。“サンタクロース”、“パパ”などと入力したところ、すでに娘が検索した跡がありました（さすが6年生、ネット世代です）。それから毎日、娘が「サンタクロースはいるの？」と不安そうに聞いてきます。どうやらネットで回答が見つからなかったようです。どうすべきか夫に相談すると、「サンタクロースからのプレゼントは今年から無しだな」と、素っ気ない返事。娘の友達のDちゃんのママに聞くと、「うちの子は、サンタはいないって知っているけど、サンタからのプレゼントがなくなるから黙っているんだと思う」と言います。さすが優秀なDちゃんです。大学のゼミ生に聞くと「小学校6年だったら、もうすでに知っていたよなあ」との返事。困って友人に相談したところ、良い本があると紹介されました。それは『Is there a Santa Claus?』（邦題『サンタクロースっているんでしょうか?』）です。アメリカの当時8歳のヴァージニアが、サンタクロースはいないという友だちがいたので真実を知りたくなり、父親のすすめで新聞社“ニューヨーク・サン”に手紙を出し、論説委員であったフランシス・チャーチが返事を社説に載せました。その本はその内容が元になっています。私は“これでやっと娘に回答できる”と思いました。12月23日の夜、娘はいつものように「サンタクロースはいるの？」と聞いてきました。私の今日の返事はいつものごまかしではありません。「サンタクロースはいるよ。目に見えないからといって、いないわけじゃないよ。世の中には目には見えないけど、大切なものがいっぱいあるんだよ。」と伝えました。娘はようやくにっこり笑い、サンタクロースをお願いしたいプレゼントを手紙に書いて、クリスマスツリーの葉の上にそおっと置きました。娘はサンタクロースから無事にプレゼントを受け取り、一件落着と言いたいところですが、サンタクロース騒動はまだ数年続きます。このお話はまた来年に。

皆様のご家庭では、どんなサンタクロースがやってきますか。素敵なクリスマスをご家族で過ごせますよう、お祈りいたします。



いただきもの

副園長 小谷 宜路

先日、1組の人が、園庭の南側にあるネズミモチの木から実を採ってきて、見せてくれました。見せてもらったお礼を伝えると、今度は実の中がどうなっているのかを、一緒に調べてみることになりました。黒っぽい実の皮をそっと開いていくと、中も濃い紫色の部分が続いています。さらに、慎重にほぐしてみると、白い部分が出てきました。「ココナッツみたいだね」とその人が、嬉しそうにしています。さらに続けると、白い部分の中央に、葉っぱのような形の薄い部分にたどり着きました。この日、ネズミモチの実の中に、こんなにきれいな形が潜んでいることを、初めて知りました。

別のある日、2組の人が、砂場の砂をふるいにかけて、出てきた砂状の小さな小さな石の粒を一つ、大事そうに「あげる！」と持ってきてくれました。よく見てみると、粒のところどころ光に当たってキラキラしています。特別な宝石を見つけたかのようにでした。しばらくすると今度は、黒い粒を一つ、「これも、あげるね」と届けてくれました。全体につやがあって、これもまた特別な感じを受けました。この日、石（砂）が小さくても一つ一つ、それぞれの形や色をもっていることを気付かせてもらいました。

こどもたちと一緒に過ごす幼稚園での毎日には、こどもたちから、いろいろな言葉をいただくことがあります。

「これ、〇〇してみたいよ」（使ってみていいよ、触ってみていいよ、見ていいよ）

「教えてあげるね」

「おんなじの作ってあげるね」

「〇〇、やったことある？」

こどもたちからの柔らかな言葉をいただく共に、その言葉に込められた気持ちもいただいています。“私の素敵な世界へ、あなたもご一緒にいかがですか？”というようなお誘いをいただいている感じがしています。とてもとても嬉しい瞬間です。一人一人が自分のこと、自分の世界を大切にし、さらにそれを重ね合わせながら、こどもたちは生活しているのだと思います。2学期も、こどもたちから、たくさんの「いただきもの」をしました。

急な冬の訪れを感じる日が続いています。どうぞ、ご家族皆さん、よいお年をお迎えください。



クラスだより



1くみ

「つながる」



遊びのイメージや作った物、場をきっかけに近くにいる友達を感じながら過ごす姿が1組でも見られるようになってきました。登園するとすぐに「私は今日、〇〇ね」とテラスで遊びの相談が始まり、役が決まるとすぐにその役になってやりとりをしたり、動いたりしながら幼稚園の一日が始まります。

2学期には、アイス屋さんやポテト屋さん、ドングリケーキ屋さん、海苔巻き屋さんなどたくさんのお店がオープンしました。ポテト屋さんや海苔巻き屋さんでは、お店の人の帽子を作ったり、布をエプロンにして身に着けたりしてお店の人になると、「いらっしゃいませ」と大きな声で周りの人に声をかけてお客さんの呼び込みが始まります。その声に気付いた人がお店まで買いに来てくれたり、買ったものを自分の家まで持ち帰って食べたり、“お店屋さん”というイメージをきっかけにして近くにいる友達の遊びとつながりながら遊ぶことを楽しんでいました。

また、夏頃から妖怪の博物館を作ったり、妖怪の話をしたりしていた人がいたので、新しく妖怪の図鑑を紹介してみました。その人が着替えも忘れて嬉しそうに図鑑を見る姿につられて、周りの友達も集まってきてみんなで図鑑をのぞき込んだり、気になった妖怪をその友達に聞いたりしながら過ごすひとときがありました。降園時に着替え終わると隣に座っている友達同士で絵本を読み合う姿もあり、友達と一緒に絵本の世界に浸ることを楽しんでいるようです。これまでは、“自分だけで絵本を見たい”という気持ちの人が多かったですが、友達が面白そうにしている姿に吸い寄せられるように人が集まり、自分の面白いに友達が共感してくれることで、その人と一緒に過ごす心地よさを感じているのではないかと思います。

クラスの友達の存在や友達がしていることをそれぞれに感じたり、友達の姿に刺激をもらったりしながら過ごしてきたことで、一人一人の世界が少しずつ広がってきているように感じます。一人一人のもつ素敵な世界がつながり、そこから生まれてくる新たなものを一緒に面白がりながら、3学期の生活も過ごしていきたいと思います。



2くみ



「友達から友達へ」

「おはよう」とそれぞれがもつ表情で登園するこどもたちの口からは、白い息がふわあと出てきます。やはり今年も冬の訪れがありました。冷たい空気の中をおうちの方と歩いて幼稚園に来る間に、身体がぽかぽかとして、暖かい息が出てくるのでしょうか。たくさん歩いてきたことがよく分かります。そして近頃は「せんせい！芝生が白いよ」「芝生が冷たかったよ」と嬉しそうにお知らせしてくれます。毎朝の楽しみになって、霜が下りた芝に手を当ててみると手の形になったことや、手のひらに霜を付けてパッパッと振るとキラキラと輝いたこともお知らせしてくれます。

ある日、ケースを並べてござを敷いて、焚火（をイメージした遊び）をしようとする人が、おひさまが当たる暖かいところを見つけて場を整えていました。おひさまの暖かさを感じながら焚火で野菜を焼こうとしていると、だんだん寒くなってきました。いつの間にか日陰になっていたのです。あれれ、なんでだろう？と不思議を言葉にしている人の側で、薪をくべている人が「いま火をつけるからすぐに暖くなるよ」と言いました。焚火ごっこの遊びは、温度まで変えてくれて、気持ちも暖かくなりました。

それからテラスもあたたかい日には床からの暖かさも伝わって心地良い空間になっています。イーゼルをテラスに立てて、夢中になって絵を描くこともよく見られます。よく絵を描く人があります。その姿が素敵だと感じて、自分もやってみたいと興味をもつ人もあります。「今日は絵を描いてみたの。〇〇さんを描いたんだ」と教えてくれました。〇〇さんとは、お隣で描いていた人でした。それを聞いたわたしも、素敵だなと胸いっぱいになったので、そのお隣さんにどんな気持ちなのかと尋ねてみました。少し照れながら嬉しい気持ちを話してくれました。一人が素敵だと感じると、知らない間にいろいろなところに伝わっていくことに改めて気付きました。



3くみ

「冬の楽しみ」

空気が冷え込んできてようやく冬らしさを感じる気候になってきました。幼稚園の芝生もなにやら白くなっている日があります。そのことに気付いた人が「先生！お庭が白くなっているんだけど、雪が降ったのかな？」とそわそわした様子で話す人がいました。また、別の場所では、「これとっておけないかな？」と薄い氷をもって忙しそうにしている人がいました。凍るかどうか試すために薄い入れ物に水をはって園庭に出しておいたものでした。幼稚園の園庭は日当たりがとてもいいので、水が凍る楽しみは朝の時間帯の特別なものです。

3組の会話を聞いていると「クリスマス」や「サンタさん」、「お正月」といった言葉がよく聞かれるようになっていきます。ある日のお弁当の時間の会話です。「サンタさんたちはどうやっていろいろのもの作るんだろうね。」「作っているんじゃないんだよ。買ってきているんだよ。」「じゃあ(家の)近くまで来てお店で買ってから届けてくれるのかな？」プレゼントの入手方法については結論が出ませんでした。どうやら、その人たちの中では「サンタさんは一人じゃない」ことは共通の認識のようです。聞いてみると、「一人じゃ(プレゼントを届け終わるまでに)朝になっちゃう」とのことでした。聞いているだけでなんだかワクワクする会話でした。共通の楽しい話題で友達と会話して楽しみがさらに膨らんでいるようでした。そんな楽しい気持ちを形にするかのように、3組の保育室周辺には赤や緑、白などの色を使った飾りがたくさんになってきました。子どもたちの生活はその時期折々の出来事や行事に彩られていて素敵だなと思います。

冬休みの間は家族でゆっくり過ごしたり、日頃なかなか会えない人と会ったりする普段の生活とはまた異なる大切な時間になるのではないかと思います。みんなの冬休みの「楽しかった」を3学期に聞くことを楽しみにしています。